

## 殿ヶ谷山車の由来について

殿ヶ谷地区に鎮座する阿豆佐味天神社は、延長五年(西暦九二七年)の紀年をもつ延喜式神名帳武蔵国多磨郡八座の一に数えられ、現在まで脈々と続く格式のある神社である。その阿豆佐味天神社の西隣りに位置する須賀神社は、殿ヶ谷地区の産土神として信仰を集め、江戸時代末期には例大祭に地区の神輿の渡御が行われていた。戸数六拾戸を数えた明治初期になると祭りも年々隆盛となり、神輿の渡御に合わせて山車の巡行を望む者が多くなり、当時の砂川村九番組現在の立川市砂川町より山車を買入れた。この山車の彫刻は、入間川村の甲田近江源高壽によってなされたもので、制作は江戸末期の安政年間西暦一八五〇年代と推定される。砂川村からの購入時高欄は既になく、砂川の住民の手に依りいずこかへ持ち出されたと言い伝えられている。そのため、高欄は山車購入直後に新たに甲田近江に依頼し制作したものである。

その後、殿ヶ谷住民の宝として多くの人に愛され、百年以上を経た昭和五十二年二月、山車の一部である重箱と呼ばれる台輪等の老朽化が甚だしくなったため之に改修を施した。重箱改修に使用した樺材は、約二百年前石畑の町田武一氏の先祖が樹齢百五十年以上の古木を住宅に用いたものを、改めて使用したものであり改修は昭和五十二年三月四日に完了した。総経費は八拾貳萬円をかけて行なわれた。その後、この山車の大きな特徴をなす、神が降臨する依り代である真柱が、昭和六十三年に至って新調されている。

なお、山車の巡行時に行なわれる重松囃子は、安政年間に所沢の古谷重松が独自に考案した旋律を習得し、現在四十一名の殿ヶ谷囃子連会員により地域の伝統芸能として継承されている。

平成十八年七月六日、瑞穂町教育委員会より貴重な地域の民俗遺産であることが認められ、瑞穂町指定有形民俗文化財に指定されたことを期に、この山車の正式な姿である高欄を設置し展示するものである。

平成18年11月11日

殿ヶ谷地区有財産区管理会 殿ヶ谷囃子連